

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.27

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 読書のすすめ

鍛治 聡
(薬学部准教授)

⇒ 第8回 北陸大学読書感想文コンクール 入賞者を表彰

⇒ 《優秀賞》
カフカの『変身』を読んで

中原 千 恵
(薬学部 薬学科 2年次生)

⇒ 《優秀賞》
人としてあり続けること

白杉 有律紗
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 《優秀賞》
最も幸せな童話

船戸 大 敬
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 《優秀賞》
私の銃と砂糖菓子、そして大人になってしまう人々へ

前原 東 吾
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 《優秀賞》
大学生活と『自由論』

福田 麻 未
(未来創造学部 未来文化創造学科 2年次生)

⇒ 審査委員から一言

⇒ 寄贈図書

⇒ 目次

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報



読書のすすめ

最近、本を読んだかというと・・・
本を読む楽しさを忘れてしまっていたと・・・
本を読んで何が楽しいか？



薬学部准教授 鍛治 聡

私の読書の履歴。小学校低学年の伝記から始まり、ご多分に漏れず、世界児童文学全集に至る。中学校では、国語の教科書にのっていた庄野潤三の「ザボンの花」に授業中に大受け。一人でげらげらと笑いまくり。まあ、予習をしていなかった証拠でもあるのですけどね。同級生は予習をして、家で読み終え一通り笑い終えた後だから、笑いもせずに黙々と読んでいる。・・・いやいや、これは何度読んでも笑ってしまう。

買いまくる“たち”なので、物いりになるのは致し方なく。当然のことながら、安価な文庫本に“かざる”。いままで購入したハードカバー（文学関係？）は、数えるほど。断言できるのは、テキスト関係は数多いが、およそ小説のたぐいは文庫本。中学から高校は、勉強もしないで部活以外は読んでいた様な記憶が（テレビゲームもなかったし・・・）。今となっては信じられないような定価が書かれた背表紙が、ずいぶんと日に焼けていますけど。非常に片寄ってはおりますが、敬称略で、井上靖、遠藤周作、北杜夫、三島由紀夫、小林信彦、小林秀雄、小松左京、阿川弘之、吉川英治、司馬遼太郎、川端康成・・・うっ！タ行以降が・・・そして、有名人が多いのは権威主義の現れ？タイトルや内容で選ばず、ただひたすら作者でそろえていく。これは読書といえるのかしら？

高校以降は傾向が変わりというか、すでに高校時点で新しいものに手を出すのが面倒になったのか、西遊記、三国志、水滸伝のこれら三冊を中心に、買い漁り読み漁る。これはいまだに続いている。さすがに西遊記のバリエーションは限られるものの、三国志、水滸伝はいったい家に何種類あるのだろう。作者によって、主役は変わらないものの人物への思い入れが微妙にどころか、大きく変わり結構面白い。三大学共同プログラムで機会をもらった北京の本屋さん（ロッテデパートの斜め向い）で、是非本場物をと中国語版と英語版の三国志、水滸伝をせしめようと頑張ったのだが、中国語は勿論、英語で三国志・水滸伝は何という？メモ用紙に三国志・水滸伝と書いて店員さんに見てもらっても、時間切れ。残念！この手の情熱は、タイミングを逃すとだめですね。

そういえば、祖父の持っていた「我が闘争」はどうなったのだろう？漢字とカタカナのみの記述は、たいそう古いものなのだと言っていた。中学の頃に見つけて以来、何度も読もうと思ったのだが、内容以前に目が拒否してしまった。ひょっとしたら今なら読むことができるかも・・・残念ながら、先の能登での地震で崩れてしまい、廃材とともにどこへやら。ひょっとしたら、骨董品の価値もあったかも。だけど、いま思い返すと、あの本には読んだ形跡がなかったような気がする。祖父もやはりあの表記に“まいった”のかも知れないと思うと、「やっば、血かな」。我が闘争を買えば良いではないか？ではなく、“あの本”を手にとって読みたい。これも読書のこだわりの一つでしょうか。

残念ながら、いつの頃からか、ただ文字を追う・拾うだけの行為に成り下がっていたという気がします。

まだ気付いたから良いかなというような状態です。文字を追うだけでは、何の意味もないと思います。特に、教科書も読書の対象であります。「How to本は、成功している自分をイメージして読める人にこそ役に立つ。」という記述もあったような……。サイエンスフィクションの秀作に、フォーサイズ見てきたような嘘を書き。私の好きな小林信彦さんの小説の中で、作中の人物が会話の中で川柳とも駄洒落ともとらえられるような五七五調で道化回しをして物語を進めていくくだりの中にでできます。そのとおりであります。SF小説の神髄?と捉えているのは私の一方的な思いこみであります……。生化学、薬理などすべての科目の教科書は、Scienceであります。Science Fictionではありません。事実に基づいた記述であります。ただ、難点は「真実なのだけど、なかなか目の当たりにするのは……。困難」。核の中のDNA情報をmRNAに転写して、転写されたmRNAが成熟して核外のリボソームに旅立ち、リボソームでmRNAのplanにしたがってtRNAがアミノ酸を運びrRNAとタンパク質の複合体が生命情報の集約としてタンパク質を合成していく。このタンパク質!多くの場合が生命活動を維持する上で重要な酵素であります。この酵素が細胞内のpHや温度の変化で、ダイナミックに構造を変化させて、時には働き、時には休止して生命を営んでいく。だけど、実際に目にした人はいるのかしら。文字を追うだけではなく、文字から頭の中で脳(前頭葉?)を活性化させ、フルにイメージしてみてください。そのイメージは、図に書き起こせるもので。理解が進みますよ。

本を読む。情報を収集する。人によっては、これから力強く生きていくための糧として。情報は、糧となる。だけど、有効な糧とするには文字を追い、文字を貯めるだけでは不十分。これは、私の自分自身に対する自戒であります。多くの人は立派に“感情移入・情景描写”などを行って読んでいます。そうでなかったかも知れない人、ちょっと“イメージしながら読書する”を実践してみてください。

平成21年度学術資料委員紹介

小林 忠雄	学術資料部長・読書感想文審査委員	未来創造学部教授
山崎 博久	副委員長・紀要編集委員	未来創造学部教授
藤井 洋一	紀要編集委員長	薬学部教授
鍛冶 聡	読書感想文審査委員長	薬学部准教授
轟 里香	紀要編集委員	教育能力開発センター准教授
八木健太郎	紀要編集委員・読書感想文審査委員	国際交流センター准教授
福山 悠介	読書感想文審査委員	未来創造学部講師

第8回 北陸大学読書感想文コンクール

入賞者を表彰

北陸大学では「人間性」の涵養^{かんよう}を重視した精神的基盤に基づいた教育を行っており、健康で感性豊かな人間の育成という観点から「読書、運動、芸術」に力を入れています。

その一環として、昨年度も北陸大学学生を対象にした第8回「北陸大学読書感想文コンクール」を実施しました。課題図書としては、古典・名著を中心に選定しました。第8回からは1年次生から3年次生全員に夏休みの課題として提出を義務づけたところ、391編の提出があり、そのうち担任教員の予備審査を経た111編がコンクールへの応募作品となりました。審査委員の厳正な審査の結果、以下のとおり入賞作品が選出され、平成21年1月21日(水)に薬学部分館閲覧室において表彰式を開催しました。

今年度も多数の応募をお待ちしております。

入賞作品

<p>📖 優秀賞</p>	カフカの『変身』を読んで	中原 千恵 (薬)	2年
	人としてあり続けること	白杉有律紗 (薬)	1年
	最も幸せな童話	船戸 大敬 (薬)	1年
	私の銃と砂糖菓子、そして大人になってしまう人々へ	前原 東吾 (薬)	1年
	大学生活と『自由論』	福田 麻未 (未)	2年
<p>📖 佳作</p>	『人間失格』を読んで	速水 梓 (薬)	3年
	『河童』を読んで	原田 恵理 (薬)	3年
	『Good Luck』を読んで	上棚 幸子 (薬)	2年
	『高瀬舟』を読んで	浜村 未来 (薬)	2年
	「聞くこと」でコミュニケーションを豊かに	辰巳 敦子 (未)	3年
<p>📖 努力賞</p>	『変身』を読んで	杉原 敬太 (薬)	3年
	『罪と罰』を読んで	北出 宣之 (薬)	3年
	命ドゥ宝	岩橋 美佳 (薬)	2年
	『余命1ヶ月の花嫁』を読んで	粕谷 瞳 (薬)	2年
	『高瀬舟』を読んで	豊田のぶえ (薬)	2年
	三度目の正直	樋口 敦 (薬)	2年
	自分の壁	今江 麻由 (薬)	1年
	『杜子春』を読んで	小林 朱美 (薬)	1年
	人間失格	千葉 鉄也 (薬)	1年
	山月記	寺島 達也 (薬)	1年
	善悪の基準と存在	水上絵美子 (未)	4年
	『食堂かたつむり』を読んで	屋木 美里 (未)	4年
	『西の魔女が死んだ』を読んで	坂江 生恵 (未)	3年
	明日への希望の扉	今村 麻理 (未)	3年
	福沢諭吉『学問のすすめ』を読んで	木下 夢大 (未)	3年
	知る・悩む・伝える	孫 楽 (未)	3年
	『学問のすすめ』を読んで	舟野 麻実 (未)	2年
	『あなたの呼吸が止まるまで』を読んで	辻口いつか (未)	2年
二律背反	小林 麻美 (未)	1年	
変われること。	三上 健太 (未)	1年	

* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部、学年は平成20年度。



入賞者と審査委員の皆さん

優秀賞

カフカの『変身』を読んで

薬学部 薬学科 2年次生 中原 千恵

書名 変身

著者 フランツ・カフカ



この物語は「グレゴール・ザムザがある朝、なにか不安な夢から目を覚ますと、自分がベッドで巨大な虫に変わっていることに気づいた。」という誰にでもある何気ない朝の目覚めとそれと対比するような衝撃的な状況を描き出している。私はこの冒頭に衝撃を受けた。虫へと化してしまった原因はまったく提示されておらず、夢の内容さえも明確にはされていない。夢の内容が虫へと化してしまうに至るものであったかについても「なにか不安な夢」としか記されていないため、漠然とある虫へと化してしまったという事実が一層この物語を不思議なものへと感じさせた。虫へと化してしまう前兆があったわけでもなく、突如彼が得体の知れない生き物になってしまった後の周囲の人間の反応は、人間の悲しい本質を映し出しているものではないかと感じた。虫へと化す前の彼は親類、職場でも信頼の厚い人物であったにも関わらず、目に見える姿が変わってしまった途端に周囲の態度は一変してしまう。虫へと化してしまった理由を言及するものではなく「巨大な虫」になったという事実以外は周囲の人間には重要でなかったようにも思えた。

物語中、彼は家族の厄介者として自室に隔離された。これは現実の社会でも同様に言えることだと思った。人間は自分と違う存在に恐怖を感じ、たとえそれが危害を加える存在でなかったとしても排除しようとする。自分を守るための本能的な行動なのかもしれないが、外見や自分の主観のみで少数を排除してしまうのはとても悲しいことだと思った。人間の姿をしていた頃の彼は家族のために働き、家族を支えてきたに違いないと私は思う。家族になくてもはならない存在であった彼が周囲の人間に受けた仕打ちはあまりにも残酷だと感じた。虫へと化してしまわなければその後も幸せな生活を送れたのかもしれない。

しかし、作者はあえて彼に突如試練を与えたのである。物語は主人公グレゴール・ザムザ視点から描かれているが、私は彼の家族にも多くの葛藤があったのではないかと感じた。彼は家族にとって自慢の息子であったに違いない。それが虫になったことにより家族のバランスは失われ、各々仕事に出なければならなくなった。父親は仕事への復帰、自宅に戻れば虫と化した息子に恐怖を覚えながら一家を支えるべく必死だったのではないかと思う。息子を愛していた母親も息子を直視することさえ出来ずに日々をすごさなければならなかった。唯一妹が彼を世話していたが、本当に彼女はその虫が兄であると思って世話をしていたのか疑問に思った。物語中において言及されていないので憶測だが、誰も虫が彼であることを証明できなかったのに彼女が兄であろう巨大な虫の世話をし続けたのは、きっと息子を失った母親の悲しみを少しでも埋めるためだったのではないかと感じた。彼が虫になってしまったことを家族全員が驚き、悲しみを感じたに違いないが、一番心身のショックを露にしているのは母親である。感情を持った生き物である人間だからこそ大切な人を失ったという喪失感に直面する事を避けたのではないかと思う。姿は違ってもそれがグレゴールだと思うことで亡くしたと思わずに済んだのではないだろうか。

物語の最後、彼は父親の酷い仕打ちにより死んでしまい、彼が死んだことで新しい生活へと歩み出す家族の明るい光景が描かれている。この物語の印象的だったのは何もない日常の中に実際では有り得ないであろう状況を、現実の人間が抱くであろう感情、行動を示すことで実際の私達の日常とそう遠くない所に存在しているような不思議な感覚を生じさせることである。突如周囲から排除されたグレゴールの孤独や葛藤をフィクションで描くことで、客観的にそれを受け取り、人間の持つ不条理さや一人であらなければならない恐怖をより感じさせられた。実際、その局面だけを感じることは大概有り得ない。

だからこそ作者は誰もが少なからず抱くであろう孤独、他人の不条理な感情や行動の局面だけを示すことで人間の本質にあるものを描き出そうとしたのではないかと私は思う。

優秀賞を受賞して

中原 千恵

今回読書感想文コンクールにおいてこのような賞をいただき、とても嬉しく思います。本を読むことで自分と違う視点から物事を考えることができ、幅広い視野を持つことができるのではないかと思います。今回は感想文を書くということで、ただ文字を読むだけでなく、それに対して自分の考えを持つことができ、物語によって多くの事を考えさせられました。これからも、本を読む事で自分を成長させていければと思います。

優 秀 賞

人としてあり続けること

薬学部 薬学科 1年次生 白杉 有律紗

書 名 変身

著 者 フランツ・カフカ



今回私はカフカの『変身』を読んで、何よりもまず、人が人でなくなることの恐ろしさを感じました。それは主人公が人から虫になってしまう事の、身体的な変身ではなく、心が虫になってしまう事に対する恐ろしさです。

読み始めの頃は虫になってしまった事に対して、真面目な主人公が仕事を投げ出してしまいたいと望むあまりこのような恐ろしい夢を見て、目覚めてからそれは良くないと、真面目に働く事を示唆する様な話かと思い読み進めましたが、虫になってしまった事は主人公にも、そして読者にも変わらない事実のまま物語は進行してゆき、最後までそのままでした。しかし、虫になった事が事実だと思いながら読み返すと、この状況は主人公の夢であることには変わりなく、私が考えていた夢とは違い、現実に思い抱く夢、つまり主人公の隠れた願望が歪んだ形で現れたのではないかと感じました。

ですが主人公の夢が歪んだ形であれ叶っただけでは、話の内容は眠りの中で見る夢と見た場合と物語が教え説く内容は変わりません。むしろ、この物語で注目すべきなのは主人公が人であったときには考え付かないような行動に出してしまう所、人の心を失ってゆく姿なのではないかと私は感じました。

まず主人公が虫になった事で始まる、人間の姿の頃にいまいるかと思っていた、仕事をさぼる様な人間よりも墮落した生活、それどころか人以下の生活を送る姿は、自分では何も出来ず、家族の施しにすぎりつく現代のニートの生活を彷彿とさせるものがあります。ただ、そのような生活に陥ったとしても、ニートのようにその生活に甘んじる事を許さなければ、それが主人公の願望に沿った生活でなければ、もっと必死になって人としての生活を取り戻そうとしたはずで、これによって、主人公は自らの手によって人としての生活を捨ててしまった事になります。また、主人公は虫の生活の中で何度も家族に希望や救いを求めましたし、彼の人の心が失われないうちは主人公の面倒を見ていた妹から、人であった頃のような優しさを受ける場面もありました。家族が何度も人を思い出させる機会を与えているにもかかわらず、主人公は“人間”を何度も思い出すだけで、そうだったのかとそのまま流してしまします。流してしまわなければ、主人公は人としての自分を思い出すことが出来たかもしれない、家族は彼を虫扱いするようにはならなかったかもしれない。自ら望んでおきながら家族の手さえも撥ね退けてしましました。そうして主人公は虫の自分から脱出する手立てを全て自らの手で捨ててしまったのです。

これは主人公の願望通りに動いてなってしまった結果であるけれども、自業自得どころの問題ではないと思いました。

著者のフランツ・カフカはこの『変身』が書籍化される際、挿絵や表紙には一切虫の絵を描かないで欲しいと注文したそうです。私は、この事や本文中の描写を考えると、主人公から人を奪っていったのは、虫になってしまったという境遇ではなく、人間的でない生活や、それを作り上げた墮落した心であって、それがなければ虫の姿から元に戻る事も、それ以前に虫になる事さえなかったと思いました。また、この物語は、主人公が虫になってしまうという非現実的な所や時代背景が現代と違うところがあるけれども、今に生きる私たちの生活にも潜んでいる恐怖ではないかと思いました。

人が人であることは当たり前だと思っていましたが、思い返してみれば、人であり続けることは生きる誰もがほとんど無意識に維持し続けている事であって、そのバランスも願望一つでこの本の主人公のように人を捨ててしまう事が容易に出来てしまう程に脆いものであり、主人公の生活に似通った例としてニートという存在を挙げましたが、実際にそのような人たちが現実存在する虫になった主人公ではないかと思えます。

誰でも主人公のように日常を投げ出したいという気持ちが少しはあると思います。しかし、日常を投げ出す事は人として生きてきた今までの自分を捨てるに等しい行為、人をやめる事そのものだと思います。自分に負けて社会から逃げ出し、現実から目を背けてしまう人間が社会問題となる昨今、この『変身』という本は、人として生まれた私たちに、人として生きて行く事の大切さと難しさ、そして自分に負けてはいけない、積み重ねてきたものを大切に守っていかなければいけない事を教えてくれる素晴らしい本だと思いました。

私もこの本に教えられた事を忘れずに、人であることを、日々を大切に生きていきたいと思いました。

優秀賞を受賞して

白杉 有律紗

一つの本に対して、個人が持つ感想は人それぞれ、ましてや『変身』は古くから親しまれてきた小説です。感想文を通して、その内の一つである私の感じたことがこうして評価していただいた事を、大変光栄に思います。今後も、様々な本を読んでたくさんの事を学びたいと思います。また、この場をお借りして受賞に至るまでにお世話になった全ての方に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

優秀賞

最も幸せな童話

薬学部 薬学科 1年次生 船戸 大敬

書名 銀河鉄道の夜

著者 宮沢 賢治



物語の始まりと終わりでは、ほとんど何も変わっていない。ただ、主人公の親友であるカムパネルラが死んでいるということ以外。そこは小さな町のごくごく一部であって、主人公であるジョバンニが王子様になったわけでもなく、意地悪なクラスメイトも、ジョバンニの不幸な境遇とて、何一つ変わってなんかない。

だけれども、彼は幸せになった。そこにあるのは、心の底から憎んでいた宿敵を討ち果たした、とか、末永く幸せに暮らしました、とかって言うのとは違って。ただ彼が、「僕はもうあのさそりのように本当

にみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん焼いてもかまわない」そう思えたからじゃないかと、僕は思う。

その言葉にカムパネルラはこう答えていた。「うん、僕だってそうだ。けれども本当の幸はいったいなんだろう？」

幸せってなんだろう？ごくごくありきたりな疑問で、皆が答えをほしがっていて。だからきっと、人を殺したり愛したり、お金を奪ったり与えたりしている。幸せを文字通り、一生、懸命に探している。でも、それを見つけられた人って、ほんの一握りしか居ないんじゃないだろうか。

幸せは、いつでも感じる事が出来る気がするけれど、感じた途端にその姿が消えてしまう。それはおいしいものを食べた瞬間だってそうだろうし、お風呂に入った瞬間なんかもそうだし、きっと恋人といるひと時なんかもそうなのだと思う。いうなら、感動とか、そういうものと同じ分類のような気がする。どんどん盛り上がるか、いきなり来るかはさておいて、とにかく感動や幸せの絶頂っていうのがあって、それからは余韻だけを残して静まっていく。そう考えると、小説とか写真とか絵画とか、そういった芸術作品は、きっと一瞬の感動や幸せを留めておこうとする試みなんだろうと思う。その瞬間に感じた感動をそこに本当にとどめる事が出来て、その感動が色あせることなく、観る人の心を穿つことが出来るなら、それはもう作者にとってみれば表した感動以上の幸せだろう。ただ、それは感動した一瞬という現実の模倣である以上、事実的にはその再現はきっと不可能だろうと、同時に思う。感じた感動以上の感動を表すことがあったとしても、感じた感動とまったく同種の、寸分たりとも狂わない感動を再びそこに表すことは、時を止めるか戻すかでもしないとありえない。

つまり、幸せはいつか消えてしまうものだ、ということ。永遠に幸せを留めておくことは、おそらく出来ないはずだ。けれども、彼は幸せになった。ジョバンニは幸せになった。きっと色あせることのない幸せを、彼は掴んだ。

どういうことか？それは、彼は彼の生き方を見つけられたからではないかと、僕は感じた。

どんな生き方なのか、それは、「僕はもうあのさそりのように本当にみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん焼いてもかまわない」

きっと、そういうことだと思う。人は誰かといれば、本来その分自分を殺さないといけないものだから。もし自分を殺してでも、誰かを愛し幸せを願うことが、その人にとって生きていることで、幸せなら、その人はそこにあるだけで幸せになれるんじゃないか。

愛されることは幸せだけど、愛することはもっと幸せなんじゃないか。愛するその人といっただけで幸せ。その人と並び歩いているそれだけで幸せ。それはきっと感動の連続で、喜びの連続で、それはきっと、絶えることのない幸せだろう。

それが、すべてに言えるのなら。その人はそこにあるだけで幸せだろうと思う。

だからこれは、最も幸せな童話。ある不幸な少年が、王子様になるでもなく、巨万の富を手に入れるでもなく、ただただ幸せになる。

たったそれだけの、幸せのお話。

優秀賞を受賞して

船戸 大敬

今回優秀賞を受賞でき、嬉しい以上の意味を感じます。というのは、作文は僕にとって自身が得たものの結晶、或いは得た感動をそこに留める行為であり、それに対し、端的に第三者が評価を与えてくださったというのは、自分の考えに対し、少なからずの共感を抱いてくれたことを期待して良いと思うからです。これを励みに今後も読書、また文章を書いてゆけたらと思っています。この稚拙な文章が少しでもあなたの心の栄養となれたのならば幸いです。

優秀賞

私の銃と砂糖菓子、そして大人になってしまう人々へ

薬学部 薬学科 1年次生 前原 東吾



書名 砂糖菓子の弾丸は撃ち抜けない

著者 桜庭 一樹

皆そうなのではないか。

皆最初は子供で、そしていつの間にか大人になっていて、いろいろなものを背負わされている。社会的な地位とか、立場とか、或いは家族とか、友人とか。そういったものが私達を大人にして、責任を負わせて、その負った責任の分だけ、力もくれる。

それを作中では、「実弾」と呼んでいた。力とは、同時に責任も意味するからだ。主人公の少女は、実弾を欲していた。力が欲しい。そう言っていた。

だからだろうか、私はこの小説を読んで、恐怖にも似たものを覚えたのだ。

大人になりたくない。実弾なんて欲しくない。力は欲しい、責任も欲しい。けれど、その代償が、きっと私には怖いのだ。

責任も、大人になっていくことも怖くないけれど、その代わりになくすもの。打つことが、出来なくなるもの。子供の頃にしか打てないものがある。砂糖菓子のような、甘ったるくて、ぼこぼこことへっぴこな音しかだせないからこそ、打てるものがあると思う。それは例えば壮大な夢であったりもするだろうし、無作為にばら撒く人を傷つける言葉だったりもするだろう。

それは確かに生きていく上で限りなく不必要なものだろうと思う。人は何時までも理想を追ってはいられないし、現実世界を生きていくためにはやはり強さが必要だと思うから。しかし、そればかりだろうか。現実を見据えて社会的な強さを持って、がっばり稼いで一生暮らして、それが何だと言うのだろうか。何だと言えるのだろうか。

栄光なんていえないし、幸せだなんて、まして言えない。

そうわかっているのに、そうなってしまった人々があまりにも多すぎはしないか。何故だろうか。皆、最初からそうだったわけではないのだろう。子供のときは誰だって、純然たる夢を追って夢を持って、砂糖菓子しか撃てない銃を片手にいつかそれが実弾に変わる日を心待ちにしていたのではないか。

人はいつから理想をなくすのだろう。人はいつから夢が怖くなるのだろう。

人はきっと、夢を描いてゆくことが怖くなるんじゃないか。無邪気だから許された夢も、見るだけで叶わないということを知ることが怖くなるんじゃないか。

私は、そのことが酷く恐ろしく思える。何もしない人がただ一人で茫洋ぼうようと自身の夢を夢想していることも恐ろしいけれど、生きている人間が何一つ夢を見ずに茫洋と暮らしているほうがもっと恐ろしい。

私からすれば、それは生きていない。呼吸をしている。息をしていると言うだけであって、ちっとも生きてはいない。

人が生きて、逝くことにホントは意味など何も無いと思う。ただひたすらに地球の営みの中の一つであって、ただの生命現象の事象なのだと。でも、それでは少し寂しすぎる。だから人は自身を他人に見出して、そこにいた証を夢に求めるのだと思う。そしてそれが、生きてゆくことなんだと、私は思う。

だから人は、夢がないと生きてゆけない動物なのだろう。砂糖菓子の銃を、そして弾丸を捨ててはいけないのだ。実弾を渡された多くの人々は、喜び勇んで鉄の銃を握り締め、砂糖菓子のことなんてすっかり忘れてしまう。

忘れてはいけないと思う。みんな、砂糖菓子の銃弾しか撃てなかったこと。砂糖でべたべたしている、詰まりかけた銃を必死こいて握り締めていたこと。そこで自分が守っていたものを、捨ててはいけない。

夢は叶わなくてもいいと思うし、叶ってしまえば夢でない。それは感動という別のものだ。

もう、そんなに残ってはいないだろう砂糖菓子の弾は、けれどもどこかのポケットに、きっと残っているはずだろう。長い間しまっていたなら、多少溶けていびつになっているかもしれないが、それがどうしたと言うのだろう。

その弾を大事にとっておくことは、自分の夢を、いつまでも忘れないということだと思う。例え叶わない夢でも、いつでも夢中であること。それがきっと、生きていくことだろう。

優秀賞を受賞して

前原 東吾

今回、このような賞を受賞できるなど考えてもいなかったのが驚きと感謝、光栄な思いでいっぱいです。この読書感想文コンクールは、非常に有意義な機会だと思います。それは、多くの本に出会うことで、知識や感性、読解力など大切なことを学ぶことができ、また、多くの作者の表現、描写、構成など個性も楽しむことができるからです。一冊の本との出会いが、人生を変えることがあります。今後も、多くの学生がこのコンクールで、素晴らしい出会いがあると良いと思います。

優秀賞

大学生活と『自由論』

未来創造学部 未来文化創造学科 2年次生 福田 麻未

書名 自由論

著者 J.S.ミル



はじめに、この図書名でもある『自由論』という言葉を目にしたとき、意思の自由の大切さについて書いてあるのだろうと直感的にそう思った。なぜなら、意思の自由の大切さや必要性について、何度か耳にしたことがあったからだ。

しかし、この図書のテーマは「市民的自由・社会的自由」であり、私が思い描いていた自由とは違ったので正直驚いた。著書は5章編成で各章に分けていろいろな面での自由について述べられている。その中でも、第2章の「思想と言論の自由」・第3章の「幸福の要素としての個性」について、大学生活を過ごす上で関係しているなど感じた。

まず、第2章では、過去にどのような論争があったのか、現在に生かせることは何なのかが書かれている。その中で「人々は自分の意見が正しいと確信できないまま、その意見が否定されたときにどうすればいいのかわからなくなる」という一節がある。このような状況に対面したことが多々あった私には、この一節は私のことを言っているのだと自分自身につなげて考えることができた。私が受けている英語の講義では、自分の意見を他の人と述べようといった形式が多い。自分の意見に確信や自信がないまま、他の人と意見交換をすると、その人の意見の方が正しいのではないかと思ったり、自分が何について述べているのかわからなくなることが多い。若干ずれているかもしれないが、ここで述べられているものと思った。

また、他人の意見に反対である場合に、ただ単に相手の意見を侮辱したり皮肉を言うのではなく、自分の考えとどこが違うのか、自分の考えの方がなぜいいのかという面を考える大切さを改めて感じるとともに、今の日本に足りない考え方なのと思った。現代の日本人は自分の考えや思考を伝えるのが極端に下手だと思う。それは、自分自身もそうだが日本の政治家にも言えると思う。外国の政治家たちが自分の思いを明確に述べているのに対して、日本の政治家は不透明な述べ方しかしていない。批判をするにしても、相手の誹謗中傷ばかりをしているので、安心感や信頼感を政治家に感じることができない。

つまり、現在の日本では『自由論』の考え方がまったく機能していないのだと思う。私は、著書を読み自分の意見を相手に伝える大切さとその必要性について改めて感じたし、将来自分が社会に出たときに必要になることなのだと思う。

次に、第3章では第2章で述べた思考や言論を自分なりに表現するという方法や重要性について述べられている。日本は個性を生かすというよりも、集団としての協調性を求める国なので、他人と違う意見を述べるのに躊躇^{ちゅうちよ}してしまいがちである。他人と違うことを恐れていると、個性を育てることはできないともいえる。私が第3章を読みもっとも印象に残っているのが「個性は発展と切り離せないものであり、個性を育ててこそ、人間は十分に発展する」という一節である。外国では、個性を育てる教育というのはよく聞かすが、日本で個性を育てる教育というのは、少ないように思う。個性を育てないということは、一節にある「人間は十分に発展する」という部分がうまく機能していないということになる。私自身、人と同じことをしていたり、同じ主張をしていけばよいと思ってしまうがちなところがある。今まではそれでもよかったかもしれないが、国際化・グローバル化が叫ばれ、密接な国際関係がより求められている現代だからこそ、日本人は日本人としての個性が必要だし、日本国内でも自分自身の個性を磨くことが必要なのだと思う。

最後に、『自由論』という本を読み、『自由論』の考え方を実社会（大学生活）でどのように生かせばよいのか、いろいろな方向性から考えてみた。今私が過ごす北陸大学では、自分の考えを主張する機会は山ほどあるし、個性を育てるという面で考えても育てやすい環境であると思う。

しかし、良い環境にいたとしても、自らが学ぼう・磨こうと思わない限り、発展はできないと思う。今後は自身の発展のため、積極的に自分の考えを言葉にしてみたり、他の人と意見を比べてみたりしていきたいと思った。

また、個性を育てるということで、自分の長所を改めて考えてみるとともに、短所についてももう一度考えてみたいと思った。すばらしい人物になるために、大学生活を有意義に過ごすとともに、『自由論』のあり方や考え方を念頭においてこれからの日々を過ごしていきたいと思った。

優秀賞を受賞して

福田 麻未

今回優秀賞を頂けたことを大変嬉しく思います。

私自身もそうですが、自分の感じたことを素直に文章に表現することは、難しいこと・苦手なことと考えている学生が多いと思います。しかし、難しいからといって諦めるのではなく、自分を表現するというチャンスを最大限に生かして欲しいと思います。

私も、賞を頂いたことをゴールと考えず、これからもたくさんの本を読むとともに、自分の文章能力・感性の向上のために、今後も読書感想文コンクールに参加したいと思います。



審査委員から一言



審査委員長
山崎 博久
(未来創造学部教授)

今回の読書感想文コンクールは従来と異なり、3年生以下の学生すべてに感想文作成を義務づけるという初めての試みであった。また、なるべく古典を読んでもらうべく、古典の図書約100冊を推薦し、課題図書の感想文で入賞の場合には賞金も増額という仕組みにした。

本来、読書とは自発的に行なうものであり、何を読むかは各自の主體的な選択に委ねられるべきものであろう。それを義務づけ、課題図書を示すことは読書のありかたとして一抹の疑問がないわけではない。だが、最近の学生の本離れと軽いハウツー物への傾斜を考慮すると、こういう試みもありかなと思う。

結果的には多くの力作が集まり、古典の感想が多かったのも狙い通りである。読書とは作者との「対話」であり、感想文とはその「対話」を深め、記すことでもある。秀逸な「対話」が多く見られたのは嬉しい驚きであった。



審査委員
小林 忠雄
(未来創造学部教授)

現代社会には膨大な数の本がある。そのどれをとっても優れたものばかりだ。なぜなら執筆者はその一冊の本を書くのに人生の多くの時間を費やし、さまざまな思考をめぐらし、骨身を惜しまず心血を注ぎ、一字一句を丁寧に書き著しているからだ。特に古典であっても名著と呼ばれる本がそうだ。今回の読書感想文コンクールでは、そんな名著に挑戦し、そして心に留めた感想を素直に述べている作品が多いことに驚いた。読もうと思えばみんなちゃんと読めるではないか。また、本の内容を自分の身近な事柄に照らし合わせて書いているのも良かった。つまり、ただ単に興味本位に読み流さず、文章の中身にちゃんと向き合っているからだ。よくやった。感動した。最後に一言、本は読めば読むほど人間の人格を創る。どれだけ読んでも決して損はしない。



審査委員
鍛冶 聡
(薬学部准教授)

まず、多くの学生がコンクールに参加したことを感謝します。実に多くの作品をよせていただき、読んだ本に忠実な“〇〇を読んで”とのタイトルから、「ほう・・」と思わせ、作品を読んだあと「なるほど」と納得させられる独創性あふれるタイトルまで、多くを堪能させてもらいました。さらには、感想文の書き方に、このような方法があったのだと唖ってしまう作品もあり、感心させられました。甲乙つけがたく、悩み多き時間を過ごすことになりましたが、楽しい時でもありました。今年度の審査も楽しみにしております。



審査委員
福山 悠介
(未来創造学部講師)

コンクールのためではなく、自らの喜びのため、学びのため、人生のために本を探し求めて欲しい。そして、ただ読んだ、というだけではなく、そこから考えることをして欲しい。その考えたこと、感じたこと、感動したことを、もっと情熱的に表現して欲しい。もっと、「本と自分」を混ぜ合わせて欲しい。これが読書感想文コンクールの審査を終えた率直な気持ちです。

読書の感想に正解はありません。百人いれば百人の感想があるでしょう。自分の感想も時が経てば変わる事でしょう。だからこそ、今、その本を通じて感じた事を表現することが大切なのです。なぜなら、それが今のあなたの心の姿だからです。

素晴らしい本にじっくり取り組むことで、あなたの心を広く、豊かに、そして深くすることができます。ぜひ日常的に読書をし、感動の多い人生をおくって欲しいと思います。

寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。
紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名	寄贈者
有機典型元素化学	栗田城治（薬学部教授）
劉園英の漢方的健康生活	劉園英（薬学部准教授）
金沢、まちの記憶五感の記憶	小林忠雄（未来創造学部教授）
徐文長	村田和弘（未来創造学部教授）
百年華語	王涵（教育能力開発センター教授）
九鬼周造の哲学	岡崎和子（教育能力開発センター准教授）
生きているカレッジタウン 2冊	吉田和弘（就職指導室長）
歌と絵のCollage「迪」	越野外至雄（元職員）
中心から周縁へ：作品、作家への視覚 2冊	矢来千代子（元職員）

編集後記

『書経』によれば、中国古代の伝説上の帝、堯は次期帝の舜を選ぶに当たり3年間その人となりを見たそうです。アメリカ大統領選挙では国民は次期大統領を選ぶまでに少なくとも4年間あります。国家元首を選ぶには古代より現在に至るまで、慎重に慎重を重ねるのが通常です。極めて大事な人を選ぶ時、ライブラリーセンターの書物に記されている数々の事例を参考にしてみても如何でしょうか。

(柿 木)

CONTENTS

	頁
○ 読書のすすめ	1
○ 平成21年度学術資料委員紹介	2
○ 第8回北陸大学読書感想文コンクール	2
・ 入賞作品	3
・ 優秀賞感想文	4
・ 審査委員から一言	11
○ 寄贈図書	12



北陸大学
HOKURIKU UNIVERSITY

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.27

平成21年8月28日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL. 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷：カンタ印刷株式会社